

## 77 本間棗軒『内科秘録』にみる癲狂説

岡 田 靖 雄

漢蘭折衷派に属する本間棗軒（一八〇四〜一八七二）は、華岡青洲にまなび外科の名手としてきこえたが、『内科秘録』（一八六四）の名著もある。

わたしは『日本精神科医療史』（医学書院・東京、二〇〇二）の執筆にあたっては、金子準二『日本精神病学書史 江戸以前篇・江戸篇』（日本精神病院協会・東京、一九六五）によって、その心気病の記載を中心に紹介した。今回『内科秘録』全一四巻の現物を手にすることができたので、あらためてその癲狂説を紹介したい。

総論である巻之一には「脳ハ精神ノ舎ル所知覚ノ出ツル所」とし、巻末の脳図には「腦者。造<sup>二</sup>靈液<sup>一</sup>。以<sup>二</sup>発<sup>一</sup>精神<sup>一</sup>。耳目口鼻。四肢百骸之知覚運動。尽本焉。」と、西説の脳説をとりいれている。巻之二では、

傷寒のさいの症状精神疾患がよくえがきだされている。

おなじく巻之二で、中風は実は二病であるとし、風邪の中風を半身不遂の中風とわけて天行（流行性）中風とよんでいる。巻之四の中風のところでは、「中風ハ即腦及神經ノ病ナリ」ととき、さらに「中風・癩証ハ古ヨリ判然トシテ二病ニ分ケタレトモ実ハ一病ナルヘシ少壮ノ時ニ発スルトキハ癩ノ諸証ヲ見ハシ老衰ニ及テ発スルトキハ中風ノ諸証ヲ発スルナリ譬ハ驚癩ハ一病ナレトモ長幼ニ因テ其見証異同アレハ」などとする。

巻之五はもっぱら癲狂関係にあてられていて、健忘、眩運、（嗅覚変調）、麻痺、癩癩、石寐、狂、邪祟、心気病につきのべられている。麻痺は「中風癩証ノ微漸ニ属ス」とかきだされている。癩癩は「其因多クハ父母ノ遺孽ヲ受ケ血脉ヲ引テ発スル者ナリ」と、遺伝因が主張されている。陽癩は急証とあるが、その記載はほぼ大発作である。緩証の陰癩の記載は、部分発作、舞踏病（この名ででている）、チックなどをふくむ。狂は「癩ノ変証ニシテ即チ脳病ナリ」。急発の陽狂は興奮状態で、一見おもいようだが、治する者がすくなくない。緩発の陰狂は

抑うつ状態、被害妄想状態が前景にあるもので、かるいようだが治する者まれである。邪祟を本間は否定し、狐憑ハ狂癩ノ変証」ととく。狐体は大で人身にはいるはずがないのである。

心気病の記載はとくに注目するべきものである。「稟賦強健ナレトモ自ラ虚脆ト為シ無病ナレトモ自ラ有病ト為シテ深ク之ヲ憂ヒ若シ眉一毛ニテモ脱スルトキハ癘風ト為シ或ハ風邪ニテ刻嗽シテモ勞ト思ヒ」、「飲食スルトキハ頭中ニ入テ腸胃ニ下ラスト云者アリ」、「此証一タヒ床蓐ニ臥スニ及テモ診シタル所ニテハ何等ノ脈証モ無ク平生ニ異ナラス然レトモ起ルコトヲ得ス」などと、抑うつ的な心気病の状態を的確にえがきだしている。吳秀三が、それまで訳語のなかったヒポコンドリーに「心気症」をあてた出典がこれである。ただ本間は、「心気病」といながら、「心気」の語も同義につかっている。だが、本間がひく『素問』あるいは、『金匱要略方論』をみても、生理的なものである心気の変、虚が病態なのである。本間とおなじように現代の精神医学者も、心気症の意で、「心気」の語をつかって、まぎわらしい。

卷之八の積聚にある奔豚気は、「実ハ癩ノ一証ナリ」、ヒステリー球だろう。卷之十二の小児のところにも、「驚風・癩癩・中風ノ三症ハ同病ナルヘシ」とある。そのほか中酒、驚怖死、鬼魔、解顛、語遲、行遲、啞などの記載もある。

こうして本間は、中風も癩狂も脳・神経の病いで一病とし、あるいは心気病も「脳病ニシテ癩ノ変証ナリ」とするなど、かれが批判的にかく香川修庵の「癩者驚癩狂之總名」ににる。また、脳病説をとるが、病証記載や薬方は従来医学のものが主である。風茄子まんだらけ（「世ニ売買スル狂ノ薬」とある）および阿芙蓉液の使用はあたらしいものか。心気病の治療には、「第一ニ権道ヲ以テ心気ヲ一変スルヲ良策トス」とある。

（精神科医療史研究会・東京）